

阿波の偉人
再発見！

鳥居龍蔵



その⑤

カラチンの星

徳島県内で使われている中学二年の道徳の教科書に「カラチンの星」という作品があります。これには、鳥居龍蔵・きみ子夫妻が内モンゴルのカラチンで苦労しながら調査をする姿が描かれています。

龍蔵・きみ子夫妻は、1906(明治39)年、当時の内モンゴルにあった王府の一つ、カラチン王府に教師として招かれました。カラチン王は、女子教育に力を入れており、その女学堂の二代目教師としてきみ子が抜てきされたのです。

龍蔵も男子学堂の教師をしながらか、周辺の調査もしたいと希望していたので、カラチン行きでした。

一年間の教師生活を終えた夫妻は、出産のため一時帰国した後、再び幼い子どもを連れて内モンゴルの地に戻りました。途中、北京やカラチン、赤峰(せきほう)で休養を取りながら(1907年11月下旬には、赤峰でモンゴル語を学習しながら周辺地域の調査も行いました)準備を進め、1908年3月15日、いよいよ親子3人での調査に出発しました。内モンゴルを馬車で北上する旅の途中、最も苦労したのは、シラムレン河を渡ることでした。河には現在のように橋は架かっておらず、しかも龍蔵たちが河に差し掛かった時は解氷期で水かさが増し、とても渡れる状況ではありませんでした。渡れ

る場所を探しながら数日間を過ごし、やっとのことで渡りました。草原を駆け念願の白塔に到着し、熱心に調査を行いました。

その後、さらに北に向かい、外モンゴルに入り、ヴェルノール湖にまで行きました。近くの王府で、王が力士を召し抱える習慣があるモンゴル相撲を見学したり、チベット仏教やシャーマンの調査なども行い、8カ月におよぶ調査を終えて11月9日に北京に到着しました。



モンゴル調査時の鳥居親子

龍蔵の調査を助けてくれたのは妻と子でした。幼い子どもは地域の人々と話す雰囲気をやかにし、きみ子の堪能なモンゴル語も龍蔵の調査には大きな力となりました。民俗学的な調査はきみ子に任ずるまでになっていきました。

この調査をきっかけに、たびたび龍蔵はモンゴルの地を訪れています。その成果は「滿蒙の有史以前」という論文に結実し、夫婦の念願であった文学博士号を取得しました。

現在、カラチン王府は、清代蒙古王府博物館として復元整備されています。カラチンでは、きみ子が教えた日本の歌が今も歌い継がれているそうです。

(徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 岡山真知子)